

異文化コミュニケーション NEWSLETTER: Intercultural Communication

No. 37 June, 2000

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
1-4-1 Wakaba, Mihama-ku, Chiba, 261-0014 JAPAN

〒261-0014 千葉県美浜区若葉1-4-1
神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所
Phone / Fax 043-273-2324 E-mail icci@kanda.kuis.ac.jp

English Language Intellectual Imperialism and its Consequences

BEFU Harumi (別府春海)

Much has already been said about English language imperialism. My short essay takes off from where my predecessors in this genre have left off. The role of language in shaping our perception and thought process is too well known to the readers of this newsletter. Nonetheless I wish to explore its intellectual consequences in the context of English language imperialism. I refer especially to writing in English in scholarly fields, especially in the humanities and the social sciences. Treatises in English not only require a certain structure of argumentation that is very different from that in other languages such as Japanese. To be successful, one must internalize thought processes inherent in English language and logic of construction of argument in English. Even more important, it assumes a certain level of sophistication about the history and the civilization of the West.

In spite of the attendant difficulty in mastering English, for a variety of reasons, non-native English speaking scholars are motivated to engage in English language-based research. For one, this enables them to tap into the vast research funds available in US—vast in comparison with what is available in their own countries for example, through joint research with American colleagues. It also enables them to publish in large numbers of scholarly journals in English. In part due to the overall American superiority (read imperialism) which has nothing to do with scholarly achievements, American scholarship generally enjoys the highest prestige in the world. In many developing countries scholars gain more prestige by participating in English language-based research and publishing in English “for an international audience” than engaging in research and publishing in their native tongue.

All this gives the illusion that English is a more

authoritative, more legitimate scholarly language, further inducing non-native English speaking scholars to work in English language research environment, when in reality English is merely another means of communication. If language is a means of enslavement of the mind (Gramsci), developing competence in English to achieve scholarly ambition is a process of willing, self-motivated enslavement of the mind in English language intellectual imperialism. Francis Fanon once remarked with lamentation in reference to African intellectuals whose indictment of colonialism has to be expressed in the languages of their colonial masters.

Instead of language enslavement and intellectual imperialism, however, one more often is told of the benefit of learning a second language, such as English. For example, non-native English speakers can relativize their own language and appreciate each language on its own terms. It was Goethe who said that one who does not know a foreign language does not know his/her own language. This view further encourages non-native English speaking intellectuals to develop English language competence; for it confers laurel for their effort. But the consequence of it is to further English language intellectual imperialism and entrapment of the minds of non-native English-speaking intellectuals.

Thanks to the global dominance of their country, American intellectuals have acquired the “habitus” (Bourdieu) of superiority, whereby they exercise the license of expressing their thoughts in English wherever they go instead of showing respect to locals through expending efforts to learn their language. This privileged position, however, spells poverty of the mind.

For their minds are imprisoned in a single language; they are unable to liberate their minds through relativizing English. In short, other things being equal, monolingual Americans (not all Americans are monolingual) are the most provincial and least cosmopolitan among those who traffic in the global interlinguistic community—a price they pay for the strength of the country backing them.

(Professor Emeritus of Stanford University. Currently at Humboldt University.)

言葉で表現すること、 しないこと

To Verbalize or Not to Verbalize

手塚千鶴子 (TEZUKA Chizuko)

The purpose of this essay is, first, to discuss the unique and attractive power of expressing self non-verbally from the perspective of intra-personal communication, and then, to call for more attention to the similar important role played by intra-personal communication in inter-personal communication processes or the interaction between these two levels of communication.

昔アメリカに留学した頃、私は、何でも言葉にしないではずまされないアメリカ文化のプレッシャーに辟易し、言わないでもわかって欲しい甘えを強烈に意識させられた。が、一方で、思い切って言葉にすることやコミュニケーションの風通しの良さにも、目を開かされた。帰国後は、どうやら本来の分析癖も手伝ってか、言語化、明確化への傾向が強まったように思う。それには、留学生に授業をし、日本語と英語でカウンセリングをするという仕事の性質上、余韻のある以心伝心には頼れず、また文化通訳として日本文化の諸側面を解説するという責任に加え、とにかく言葉のおぼつかない彼らに言葉で確認せざるを得ないという事情があった。

しかしここ数年、そういう言葉による自分のコミュニケーションのあり方に、不満や疑問が多くなった。例えば、ある青年は、書く話す共に日本語は見事で、カウンセリングのセッションは一見スムーズに進むのだが、一向に悩みの種が改善されなかった。わたしの未熟さではあるが、とにかくお互いの言葉が滑り過ぎていたのである。言葉として表現されたものに足をすくわれ、その背後のより確かな、言葉以外の何かで表現されているものを捉えられなかったのである。

このような事をきっかけに、言葉によるコミュニケーションに距離を持ち始めた頃、体調を崩してしばらく仕事を休んでいたが、その生活の中で不思議なコミュニケーションを経験した。白い台紙に気に入った雑誌やチラシ、写真などを好きなように切り、張っていくコラージュを楽しんでいた時の事である。

ある雑誌のグラビアにボストンの港の写真があり、波止場が前面にあり、バックに夕日を浴びたビル群が立っている。それをほぼ下に丸みのくる半円形にカットし、台紙の下の方に張った。次にその上方にぴったりくっつけて、蔵書をたくさん収めたがっちりとした図書室の中を写した写真を縦長の長方形にカットして張り付けた。その長方形の中心あたりに、三人の少女の手を引いてはにかんでいるアメリカ人の若い父親のグラビアを丸く切り取り重ね張りした。すると図書館の棚がひどく重そうに見え、台紙の斜め前方に茶色のグラビアで二本の細い棒を切りだして、これも重ね張りした。するとどうだろう、四人を乗せた大きな船が、二本の長いオールを使ってまさに、港から船出し

て行くではないか。と、同時にわたしの中の停滞していたエネルギーが、うごめきだしたような気がしたのである。

自分のなかの曖昧ではっきりしない何かを、表現する楽しみや、はさみで切り出す皮膚感覚も面白いが、コラージュは時に、言葉をもたない自分からのメッセージを届けてくれる。船出のコラージュは、「少し動いてみたら、できるよきっと！」と言われたみたいに背中をポンと押され、実際、久しぶりに友達に会いに出かけられたのである。これはコラージュという媒体を用いて行った、自分ともう一人の自分とのコミュニケーション、いわば対自的コミュニケーションとでも言えようか。

体を使った別の対自的コミュニケーションとしては、留学する決心がつかかねていた時に、大学での実習で行ったフォーカシングというカウンセリングの技法の体験がある。実習相手の誘導で、まずはリラックスできるイメージを思い浮かべ、体を解放しつつその体の感じに集中していくと、暖かく包み込むようにたゆたっている大海原のなかで、仰向けに浮かんでいる自分がイメージされ、気持ちの良い一時を味わった。目を開けると、「まあ留学したら色々あるだろうけれど、何とかなりそうだ」という、安心感がひろがり決心がつけられたのである。イメージを介した自分との対話がうまくいき、自然に前向きな気持ちになり踏み切りがついたのである。

次にカウンセリングというセラピストの介入するセッションで、身体を通してのコミュニケーションと、言葉によるコミュニケーションが、有機的、相補的に使われている、ミンデルという人の家族療法のケースを見てみよう。姉、弟と両親の四人家族だが、しじゅう姉と弟は喧嘩をし、内向的な弟は姉に怒鳴られるとついうなだれてしまう。この動作に注目したミンデルは、喧嘩やどなられるのは嫌いでもっと静かに時間を過ごしたいということ、弟が言語化出来るよう介入したところ、二人は仲良くなって面接を終えた。ところが、家に戻ると弟は部屋に閉じこもり、姉はうつ状態になったという。そこでミンデルは、弟は実はあの瞬間自分の気持ちを言葉にする事を望んでいなかったのではないかと、弟には言語化だけでなく、身体で気持ちをもっと伝える必要があったのではなかったのかと感じ、次のセッションには、更に注意深く弟の動作に働きかけ、身体レベルでのコミュニケーションを十二分に大切にしつつ言語化をも援助していった結果、二人はずっとよく理解しあい仲良くなったという。この例では、対人的レベルでの、身体と言葉双方を介してのコミュニケーションが、うまくくみあわせられ展開していった。

おなじプロセス指向心理学の藤見幸雄の家族面接のセッションは、言葉中心に表現し、コミュニケーションすることと、身体をもフルに使って表現し、コミュニケーションすることとの、際だったプロセスの違いを、ドラマチックに見せてくれる。両親とやってきた不登校の小学生の男子は、こどものネズミを描いて、「かわいいね、かわいいね」と、親と話していた。そこにうさぐさを感じた藤見は、こどものネズミを演じてみようという提案。すると全身でネズミになりきったこどもは急に攻撃的になり、「お父さん、お母さんの話をちゃんと聞いて！お母さん、僕にいつも言っていることをお父さんにも言わなきゃだめだ

よ！」と叫び始めたという。絵について話していた時の良
い子が身体を介在させたことで、ずっと真実味のあるプロ
セスが展開したという。本音のコミュニケーションが生ま
れたのである。この対人的コミュニケーションで、少年が
偽りのコミュニケーションから抜け出されたのは、身体を
使うことで、その子のなかに流れているはずの本当の自分
の声に触れる、あるいはそれが引き出されるという、上質
の対人的コミュニケーションが生じたからではないだろう
か。

わたしはこれまで異文化コミュニケーションを考えるの
に、バーバル・コミュニケーションに重きを置き、かつそ
のように実践してきたが、身体を含め、もっとさまざまな
チャンネルや媒体にも今までより深い関心を寄せる必要性
を痛感している。それは、対人的コミュニケーションに比
べ、より聞こえにくく見えにくい対人的コミュニケーション
のプロセスをもっと考察する必要性ともいうことができ
よう。(慶應義塾大学国際センター助教授、Associate
Professor of International Center, Keio University.)

参考文献

- 藤見幸雄(1999)『痛みと身体の心理学』新潮社。
竹内敏晴(1999)『癒える力』晶文社。
徳田良仁監修、飯盛真喜雄、浅野欣也編(1989)『俳句・
連句療法』創元社。

携帯コミュニケーションの爆発 とアジア文化 Explosion of Mobile Communications and Asian Culture

高崎望(TAKASAKI Nozomu)

Globally, it has been considered that IT revolution was
triggered by personal computers. U.S. is the first run-
ner in this area. However, only for the last two years,
the communication world has been astonished with an
unprecedented explosion of mobile telephones in Asia,
specially Internet accessible mobile terminals in Japan
which will penetrate to other Asian countries in a few
years. At the background of these phenomena, we can
observe some characteristics of Asian cultures, differ-
ent from those of Westerners.

今や文明論から人類史上第3の産業革命と言われて、世界
を席卷しつつあるIT革命の代名詞は言うまでもなくイン
ターネットであるが、インターネットのみならず、ISDN
網、Eコマースやデジタル放送など、多種多様なITア
プリケーションの急速な浸透によって、世界は“デジタル

格差”と呼ばれてIT先進地域と後進地域に分割され、社
会的には“情報富者”と“情報貧者”という階層分化を起
こしつつあると言われている。

前者として独走してきたのが言うまでもない米国であ
り、パソコンの普及率は2世帯に1台近く、それによるイン
ターネット接続は7割を越え、米国発による内容は8割に及
んで、日本・EUを大きく引き離してきた。異例の長期経済
成長も、例年その5%以上がIT産業の継続好調にあると米
政府は発表している。遅れを取った他の先進諸国も不況脱
出の方途をこれに求め、第3次文明革命の成果を享受しよう
と懸命である。

このような米国主導型のコンピュータ・ネットによる情
報社会へのグローバル・トレンドから見ると、日本はまだ
しも、アジアは絶望的に立ち遅れていると見られてきた。
ところが1998年から、日本を源泉地としてアジア独自のIT
ネットが爆発してきた。それが移動通信である。携帯電話
を端緒とする移動情報端末がインターネット接続のみなら
ず電子商取引や電子貿易に活用され、さらにはビジネス
・マナーや若者ファッションまで日進月歩で塗り変えら
れ、現在、アジアでは「モバイル文化論」がかまびすしい。

従来から有線通信ネットワークの貧弱なアジアでは、止
むなく無線による電話に依存してきた。反面日本ではIS
DN(光ファイバー)の世界的先行もあって、1995年まで携
帯電話は副次的に見られてきた。ところが、若者特に独身女
性が“おしゃべり”の便利さとそのファッション性に飛び
つき、それをビジネスが活用するに及んで、異常な普及が始
まり、事業者の予測をはるかに越えて急増し、2000年3月
には6,000万台となって普及率約50%、固定電話を上回る
という逆転現象が起こった。普及率は米国の2倍近い。これ
に追い打ちをかけたのがNTTドコモのインターネット接
続(Eメール、銀行振込、情報検索等)可能の“iモード”
である。この世界初の情報端末は、2000年4月末には650万
台、秋には1,000万台に及ぶと見込まれ、需要予測を日毎に
更新してもなお追いつかず、4月末には基地局機能がパンク
状態となっている。

iモードのような携帯インターネットは、米国でIT化
の主力となっているパソコンに較べ音声共用、軽量小型、使
用簡易等で優り、マイクロソフト社のビル・ゲイツが「パソ
コンの時代は去り、携帯の新時代が到来しつつある」と嘆
き、MITのレスター・サロー教授も「情報化で日米逆転
があり得る」と警告を発している。

これを観望したアジア諸国は、一斉に携帯通信に殺到
し、中国はその巨大な人口により2000年3月には日本を凌
いで6,000万台を突破、ついで韓国は99年末で1,500万台、
台湾500万台と日々急成長を遂げ、これを香港、マレーシ
ア、タイ、シンガポールが追っている。香港では最大手ハ
チソン社が日本のiモードを導入した。アジア主要9ヵ国で
は年率20%の増加を続け、2000年末には1億5,000万人が携
帯電話を利用し、そのうち3,000万人がインターネットによ
るビジネスを行うと予測されている。(国際電気通信連合調
査)

米国はパソコン・インターネットというITプロセスに
より情報社会に踏み込んだのに対し、アジアは携帯・イン
ターネットという異なったプロセスを急進して同じ情報社

会の異なった扉を開こうとしていると言えよう。この現象の背景には、キーボードとインターネット英語に象徴されるアメリカ文化と、多様な言語・文字を用い、音声コミュニケーションを重んじるアジア文化との差異が見られる。香港の芸能ホームページでは繁体字の中国語を使用しており、他にもハングル、タイ語、ベトナム語など母語の記号を組み込む動きが起きている。

さらに2001年5月から日本が世界に先駆けて実施する第3世代移動通信 I M T 2000は、i モードの200倍の大容量・高速機能によって、テレビ会議、T V 番組等の動画像やパソコンに劣らぬ情報量を全世界に接続するものであるが、相手の表情やゼスチュアなどを重視する華僑社会などでもその到来を待つ声大きい。

また、アジア人に共通して見られる、離れていても連絡を取りながら行動を同じくすること、欧米人と比べてプライバシー感覚が希薄で公共の場でも大声で電話すること、短い漢字混用の母語Eメールを多用することなど、移動通信はすでにアジアに根付いているといえよう。大家族主義やネポティズムでの便宜を指摘する研究者もいる。

しかしながら、すべての I T コミュニケーションと同様、対面コミュニケーションの持つ膝を交え、相手の微妙な表情までを読みとる深い相互理解を得るためには、特にアジア文化においては、新世代移動通信といえども、決して十分ではないことも留意する必要がある。アジアにはアジア独自の I T を開発、活用する文化的方途があると考えられる。(異文化コミュニケーション研究所教授、Professor, Intercultural Communication Institute.)

参考文献

- (2000) *Pacific Telecommunications Review*. April.
- (2000) 『2010年のビジョン』NTTドコモ。
- (1999) 『ジュネーブ会議議事録』国際電気通信連合 (ITU)。
- (1999) 『中国における電気通信の現状と動向』Info Com 第5号、情総研。

多目的小劇場完成

Theater for Intercultural Dialogue

児玉顕栄(KODAMA Akihide)

A new small hall accommodated with a stage was constructed at Kanda University of International Studies in April, 2000. We hope that new experimental projects for intercultural communication will be held in the years to come.

この4月、神田外語大学に新館(5号館)が完成し、ミレニアム・ハウスと命名された。このミレニアム・ハウスには、メディカル・センター、キャリア・センター、茶道・華道のための和室(40畳)等が入っているが、中心となるのは、

ホール(小劇場)である。このホールは、間口8間・奥行き5間のステージに照明・音響設備が完備し、床には椅子を並べることによって275名まで収容できる、演劇・舞踊・音楽などにも適応できる多目的文化ホールである。

このホールは、神田外語大学の学部・大学院・研究所にまたがる総合的な研究活動と発表の場として、学生・教員・職員のみばかりでなく、学外の研究者や一般市民のためにも開放され、ここで実施される学術的、芸術的、時局的なさまざまな催しは広く公開される予定である。

ロケーションはあたかも国際都市空間として注目を浴びつつあるMakuhari(幕張)の一角である。周辺30キロ以内の居住人口は優に200万を越える。しかし、幕張メッセのような巨大な商業展示施設は存するものの、学術的ないし芸術的活動に適した小回りのきく規模の文化施設は現在のところ皆無の幕張地区である。千葉市や県の当局は、この経済情勢下では、当分、この地区に文化施設をつくる予定はないという。したがって、神田外語大学ミレニアム・ハウスのこのホールは幕張地区における唯一の“公共”の文化施設として、その展開が期待されることになる。

アジア経済研究所、放送大学、メディア教育開発センター、OVTA(海外職業訓練協会)等の研究・教育機関が神田外語大学から数百メートルの至近距離にあるのは幸運である。これらの機関と手を携え、幕張から日本全国に向かって、さらに全世界に向かって、文化的発信の一つの拠点としてこのミレニアム・ホールが機能することを心から念願する。

ミレニアム・ハウスが出来上がってまず最初にやることは、ホール運営の専門スタッフの養成である。現在、日本各地に2,500を超える公立文化施設があるが、そのほとんどが運営専門スタッフを持たないために(実際には、人材がないために)、せっかくの施設を自前で使いきれないという共通の問題を抱えている。その轍を踏まないためにも、ミレニアム・ハウスでは、舞台およびホールの機構・舞台技術・企画制作・マネジメントに精通したスタッフの育成を急務と考え、学内の学生と教職員に呼びかけ、5月から、スタッフ養成プログラムを始めている。このプログラムから、英語・スペイン語・中国語・韓国語・その他の外国語を駆使する舞台スタッフが一日も早く生まれることを期待している。“ハコモノ”と言われる建物に専門の運営スタッフが備わって、初めて一つの文化施設は完成することができる。(ミレニアム・ハウス副館長、Associate Director at Millennium House.)

研究所からのお知らせ

寄贈図書一覧

1998年2月より当研究所に寄贈していただいた蔵書および、新刊書の一部を以下にまとめました。図書の他にも多くの論文、紀要等をいただいております。ご寄贈いただい

た多くの方々に心よりお礼申し上げます。スペースの都合で全てを掲載するには至りませんが、これらの図書や資料は、閲覧室に独自の分類で保管しておりますので、ご来訪の節には、自由にご利用下さい。

鶴沢安文『グローバル人づくりテキストブック インドネシアの人々』海外職業訓練協会、1993。
高崎望『マルチメディアの現実 浮かれすぎでは未来はない』経済界、1994。
八代京子 他編『異文化トレーニング ボーダレス社会を生きる』三修社、1998。
大橋敏子『留学生からのメッセージ 日本留学の光と影』北斗書房、1998。
産業技術会議『高度情報化政策と新技術 マルチメディア & デジタルで社会が変わる』産業技術会議、1997。
野中直文『海外・人づくりハンドブック インド』海外職業訓練協会、1997。
真鍋一史『国際イメージと広告』日経広告研究所、1998。
柳沢賢一郎『幻想好況（アメリカ）VS 心理不況（ニッポン）』日刊工業新聞社、1997。
山田俊一、鈴木剛『海外・人づくりハンドブック エジプト』海外職業訓練協会、1998。
日本国際教育協会『高校生のための交換留学 異文化理解と自己発見の1年間』アルク、1998。
久保田真弓、久保田賢一 編著『フィリピン農村女性の生活 5人のライフストーリーから』「開発と女性」研究会、1997。
植原映子『異文化理解と言語教育（上）（下）』あさを社、1997。
大崎正瑠『韓国人とつきあう法』筑摩書房、1998。
金田一郎『環日本海経済圏 その構想と現実』日本放送出版協会、1997。
園田茂人『証言 日中合弁 頻発するトラブルへの処方箋』大修館書店、1998。
村松賢一『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書出版、1998。
樋口健夫、樋口容視子『住んでみたサウジアラビア』サイマル出版、1986。
山折哲雄 編著『アジアの環境・文明・人間』法蔵館、1998。
山口生史『従業員動機づけのための異文化間コミュニケーション戦略』同文館、1998。
春原昭彦、武市英雄 編『ゼミナール 日本のマス・メディア』日本評論社、1998。
根元敬『海外・人づくりハンドブック ミャンマー』海外職業訓練協会、1998。
緒方卓『海外・人づくりハンドブック 中国（一般事情）』海外職業訓練協会、1998。
虎尾俊哉『古代東北と律令法』吉川弘文館、1995。
奥井一満 監修『ディスプレイの情報世界 シュミレーションと擬態の構造』NTT出版、1990。
生活・生産性研究集団『知のフロンティア 異分野からの報告』勁草書房、1996。

游仲勲 編『世界のチャイニーズ』サイマル出版、1991。
長尾昭哉『やさしい経済学の本』同文館出版、1995。
加地伸行 編『易の世界』中央公論社、1994。
ポダルト=ベイリー・B.M.（中直一訳）『ケンペルと徳川綱吉』中央公論社、1994。
窪田高明『王権と恋愛』ペリかん社、1993。
大胡欽一 他編『東アジアの文化人類学』八千代出版、1991。
田原俊司 編『いじめ相談室』八千代出版、1991。
JSMS 編『グローバル社会と日本企業』都市文化社、1992。
松原宏 編著『アジアの都市システム』九州大学出版会、1998。
永井浩『アジアはどう報道されてきたか』筑摩書房、1998。
パーレット、D.L.、スティー、ジェームズ（堺屋太一訳）『アメリカの没落』ジャパン・タイムズ、1993。
木下玲子『欧米クラブ社会』新潮社、1996。
饗庭孝男『ヨーロッパとは何か』小沢書店、1991。
安藤博『日米情報摩擦』岩波書店、1991。
宮本健作『母と子の絆』中央公論社、1990。
熊倉千之『日本人の表現力と個性』中央公論社、1990。
矢野道雄『占星術師たちのインド』中央公論社、1992。
佐伯啓思『「アメリカニズム」の終焉 シヴィック・リベラリズム精神の再発見へ』TBSブリタニカ、1993。
中村勝己『近代文化の構造』講談社、1995。
富永健一『近代化の理論』講談社、1996。
蓮實重彦『小説から遠く離れて』河出書房新社、1994。
井上英明『異文化時代の国語と国文学』サイマル出版、1990。
川成洋『世界の古書店』丸善、1994。
大熊利夫『色彩文学論 色彩表現から見直す近代文学』五月書房、1995。
ダウナー、レズリー（高瀬素子訳）『芭蕉の道ひとり旅 イギリス女性の「おくのほそ道」』新潮社、1994。
栗山孝夫『DNAで何がわかるか 遺伝病・DNA鑑定から人類の根源まで』講談社、1995。
天野郁夫『大学 - 変革の時代』東京大学出版会、1994。
星野命 編『対人関係の心理学』日本評論社、1998。
水野祐『日本神話を見直す』学生社、1996。
萬年甫『脳の探求者ラモニ・カハール』中央公論社、1991。
渡瀬信之『マヌ法典』中央公論社、1990。
平川祐弘『進歩がまだ希望であった頃』講談社、1990。
阿部良雄『若いヨーロッパ』中央公論社、1991。
井上雅雄『日本人の常識と社交性 外国人とのコミュニケーションを良くするために』創芸社、1990。
室謙二、バーデキー、ナンシー『日米生活対話 パソコン通信による16テーマ』晶文社、1994。
ベル、ダニエル（山崎正和訳）『知識社会の衝撃』TBSブリタニカ、1995。

浜田宏一『エール大学の書斎から』NTT出版、1993。
 ジバング編集部 編『笑われる日本人』ジバング、1998。
 小林司『出会いについて 精神科医のノートから』NHK出版、1991。
 莫邦富『中国人は落日の日本をどう見ているか』草思社、1998。
 加藤義明、中里至正 編著『心理学基礎用語集』八千代出版、1990。
 高橋順一、中山治 他編『異文化へのストラテジー』川島書店、1991。
 小松崎清介『ヴェイル AT&T社長の椅子に2度座った男。』NECクリエイティブ、1993。
 島根國土、寺田元一 編『国際文化学への招待 衝突する文化、共生する文化』新評論、1999。
 杉山徹宗『侵略と戦慄 中国4000年の真実』祥伝社、1999。
 山岸美穂、山岸健『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』日本放送出版協会、1999。
 松本茂 編『生徒を変えるコミュニケーション活動 自己表現活動の留意点と進め方』教育出版株式会社、1999。
 加賀美常美代 他編『阪神・淡路大震災における被災外国人の支援活動と心のケア』ナカニシヤ出版、1999。
 橋本満弘『異文化間コミュニケーションへ向けて 英語への新しいアプローチ』北樹出版、1999。
 黒枝一代 編著『海外・人づくりハンドブック 南アフリカ』海外職業訓練協会、1999。
 小島勝、馬洪林 編著『上海の日本人社会 戦前の文化・宗教・教育』龍谷大学仏教文化研究所、1999。
 今里滋『アジア都市政府の比較研究 福岡・釜山・上海・広州』九州大学出版会、1999。
 緒方卓『海外人づくりハンドブック 中国(業種別)』海外職業訓練協会、1999。
 海外職業訓練協会『海外での業務体験を通じて』海外職業訓練協会、2000。
 佐々木瑞枝『日本語ことはじめ』北星堂書店、1999。
 浦山重郎『サイバーネットワーク 日本再生の新産業戦略』NTT出版、1999。
 Pool, Ithiel De Sola et al. *Communication Flows: A Census in the United States and Japan*. Tokyo: University of Tokyo Press, 1984.
 Georgakopoulou, Alexandra and Goutsos, Dionysis. *Discourse Analysis: An Introduction*. UK: Edinburgh University Press, 1997.
 Lupton, Deborah. *Food, the Body and the Self*. Sage Publications, 1996.
 Shenkar, Oded. *Global perspectives of human resource management*. NJ: Prentice-Hall, 1995.
 Cohen, Herman. *The History of Speech Communication: The Emergence of a Discipline, 1914-1945*. VA: Speech Communication Association, 1994.
 Maruyama, Teresa Chikako. *Hospice Care and Culture : A Comparison of the Hospice Movement in the West and Japan*. UK: Ashgate Publishing,

1999.
 Vijver, Fons van de and Leung, Kwok. *Methods and Data Analysis for Cross-Cultural Research*. Sage Publications, 1997.
 Heine, Steven. *The Zen Poetry of Dogen : Verses from the Mountain of Eternal Peace*. Tuttle Publishing, 1997.

第42回異文化コミュニケーション 講演会報告

1999年11月4日(木)東京・神田の神田外語学院講堂において、生命倫理を専門分野とする丸山知佳子氏を講師として「『いのち』の文化比較 - 日英ホスピス研究の視点から -」の演題の下、約60人の受講者を前に講演会が開催された。氏は脳死や臓器移植などをはじめとする『いのち』に関わる様々な情報の氾濫やそれに付随する諸問題を解説しながら、自分たちの死生観を問い直す必要性、さらに日本と英国の文化的差異から発生するターミナルケアに対する認識の違いや、ホスピス制度への取り組みの違いなどについて語った。講演後は、質問や、活発な意見の交換など予定時刻を過ぎるまで白熱した質疑応答が続いた。

紀要『異文化コミュニケーション研究』 第12号発刊

紀要第12号を発刊いたしました。収録論文のタイトルと著者名は以下の通りです。ご希望の方は郵便定額小為替千円分をお送り下さい。折り返しお送りいたします。

New Perspectives on Intercultural Interaction
Through Nonverbal Communication Studies
Fernando POYATOS

1990年代の非言語 コミュニケーションの研究テーマと研究方法 データベースを用いた研究テーマの内容分析と研究の具体的手順例の分析 東山 安子

ジェスチャーの使用頻度に関する実証的研究
言語の潜在的影響 瀬戸 千尋

職場における外国人と日本人のコミュニケーション
製造組立ライン職場でのアンケート調査から 袴田 麻里

ツーリズムの社会的・文化的インパクト
ツーリストとホストの異文化接触を中心に 安福 恵美子

異文化コミュニケーション教育用ビデオの開発とその効果
文化対照法を中心に 久米 昭元

紀要『異文化コミュニケーション研究』 第13号論文募集

次号第13号『異文化コミュニケーション研究』への論文を募集しています。提出期限は2000年8月31日です。執筆規定は紀要第12号の最終頁、および当研究所ホームページに記載されています。

講演会・セミナー予告

第17回異文研 キャンパス・レクチャー・シリーズ

「東京」人と「関西」人 小さな異文化コミュニケーション

講師：遠山淳（桃山学院大学文学部教授）
日時：2000年6月23日（金）午後6時15分～7時45分
場所：神田外語大学（千葉・幕張）ミレニアムハウス
会費：1,000円
後援：千葉市教育委員会
申し込み方法：氏名・郵便番号・住所・電話番号・職業を明記の上、葉書、Fax又はEメールで研究所へ。

講師からのメッセージ：

何かと比較される東京と大阪。ヨーロッパであれば、十分に独立した別々の国家になり得るくらいだ。「東京」にいと、地方が見えない。「大阪」人は言う。「東京が何やねん。一体なんぼのもんやねん。」大阪人は「長いもん」には巻かれたくないのである。主流になりたいというのではない。頭を下げるのは、儲かるときだけである。実利主義、実学の世界である。では、京都人はどうか。神戸人はどうか。関西の三都を中心に、「関西」人のホンネと、彼らが「東京」をどのように見ているか、日本の中の小さな文化比較を試みてみたい。

第10回異文研 夏期セミナー

当研究所が主催する『異文研 夏期セミナー』では、昨年、「国境を越える文化 転換期のアジア」というテーマのもと、21世紀を目前にして深刻な経済危機と混迷に苦しむアジアにおける、国境を越えた文化交流の果たす役割について議論しました。今年は、その視点を拡大させ、「グローバル化再考 新しい視座を求めて」をテーマに、アジア諸地域とのかかわりを視野に入れつつ、21世紀に向けた日本の方向性について議論を展開することをねらいとしています。会場は恒例となりました福島県新白河のブリティッシュ・ヒルズです。

第1日目（9月1日）は、参加者の中から公募による6名の方の研究発表を予定しています。（各研究発表の持ち時間は質疑応答を含め45分です。）セミナー開会にあたってのオリエンテーションの後、基調講演に本学名誉教授、現在インドネシア在住のアリフィン・ベイ氏を予定し、「The Taming of Globalization : A Call for a New Paradigm」のタイトルで、今回のセミナーへの問題提起をしていただきます。夕食後には特別プログラムとして、文部省メディア教育開発センター（NIME）教授で工学博士の杉本裕二氏を話題提供者とする「ICT（情報通信技術）が拓く異文化交流の未来」が開かれます。日進月歩していく情報工学の成果を教育や国際会議の場に応用したいと考えておられる方々にとっては格好の機会になると思われれます。

第2日目（9月2日）は、午前中に、異文化理解教育では必須のテーマの一つである異文化センシティブティティーについて「異文化センシティブティティーを高める教育はどこまで可能か」のタイトルで、外国出身の方々を含む4人の参加者によるパネル・ディスカッションが行なわれます。当セッションは文部省メディア教育開発センターとの共同開催で、日本全国の大学や海外の大学とSCS（大学間教育交流ネットワーク）等でつないだテレビ会議形式で行う予定です。

石井米雄異文研所長によるランチョン・スピーチを含めた昼食後、ワークショップを開きます。今回は、2日目（9月2日）に（A）（B）2回のセッションを、最終日（9月3日）に（C）セッションを予定しています。テーマである「グローバル化再考」との関連で、経済、日本近代史、コミュニケーション、ビジネス、宗教、言語、環境などの視点から、7タイトル、各2回ずつ、計14のワークショップが、2日間にわたり（A）（B）（C）の3セッションで展開され、その中から自分の希望するワークショップを3つまで選んで参加することができます。ワークショップ及びその講師は以下の通りです。

アジアの経済発展と開発の再評価（神田外語大学、小菅伸彦氏） 近代日本をめぐる異文化接触の諸相（神田外語大学、山領健二氏） コミュニケーション研究の新しい視点（獨協大学、石井敏氏） 国際ビジネスにおける日本人とアメリカ人（ハワイ大学、西山和夫氏） 仏教・キリスト教伝来と日本社会（桃山学院大学、遠山淳氏） 異文化接触場面の言語管理（神田外語大学、サウケン・ファン村岡氏） 食糧・資源・環境問題と日本の対応（愛媛大学、細川隆雄氏）。

夕食は「懇親会」を兼ねています。近況報告、情報交換に加えて一芸披露等々、ぜひ楽しいひと時を過ごしていただきたいと考えています。

最終日（9月3日）は、午前のワークショップ（C）セッションを終え、昼食をとった後に、ラウンドテーブル・ディスカッション形式の分科会「日本における異文化コミュニケーションの教育と研究の課題」が開かれます。当セッションは今回のセミナーで得られた知識や交わされた意見を参加者がそれぞれの視点から整理し直し、コーディネーターを中心にした討議の中で、本セミナーの成果を確認し、次回を方向づける機会と考えています。分科会の

テーマは、言語教育・談話研究 異文化理解教育
メディア・コミュニケーション 国際協力 異性間共
生 国際交渉 コミュニケーション研究 比較文明
IT革命となっています。参加者は上記の9分科会のい
ずれかに参加していただきますが、セミナー開催中に5名以
上の希望者が集まり、コーディネーターを決めることがで
きれば、その他のテーマで分科会を実施することも可能で
す。またブリティッシュ・ヒルズでは各種施設も備わって
います。参加者同士のコミュニケーションの場としてご利用
いただければ幸いです。

参加申し込み方法

ご希望の方には開催案内をお送りします。**参加申し込み
締め切り6月28日(水)**も近づいております。お早め
にご連絡願います。尚、**研究発表の発表者(6月23日
(金)締め切り)**を参加者の中から6名募集していま
す。また、大学院生を対象にインターンシップ制度(参加
費優遇制度)があります。詳しくは研究所までお問い合わせ
下さい。また、当研究所ホームページにも掲載されてお
ります。ホームページからのお申し込みも可能です。

当研究所へのお問い合わせ・お申し込みは 下記へ

〒261-0014 千葉市美浜区若葉1-4-1

Tel/Fax: 043-273-2324

E-mail: icci@kanda.kuis.ac.jp

URL <http://www.kuis.ac.jp/icci/>

学会・セミナー予告

2000 Summer Institute for Intercultural Communication

Session 1 : July 12-14 Session 2 : July 17-21
Session 3 : July 24-28

For more information, please contact:

The Intercultural Communication Institute
8835 SW Canyon Lane, Suite 238, Portland,
OR 97225, USA
Phone: 503-297-4622 Fax: 503-297-4695
E-mail: ici@intercultural.org
Website: www.intercultural.org

名古屋異文化コミュニケーションセミナー

共催: JAFSA(外国人留学生問題研究会)

会期: 2000年8月10日(木)~13日(日)

会場: 岐阜県多治見市神言会研修センター

開講セッション及び講師: 異文化コミュニケーション入門(太
田浩司)、語学教育と異文化コミュニケーション教育(架
谷真知子)、異文化適応オリエンテーションの開発(近藤

祐一・堀江未来)、異文化間カウンセリング(水野治久)、
外国人留学生アドバイザー入門(白土聡実・横田雅弘)
問い合わせ先: 南山大学外国語学部近藤祐一
E-mail: kondo@ic.nanzan-u.ac.jp
Fax: 052-832-5330

7th European Summer Seminar in Intercultural Studies

Concepts in Intercultural Encounters
In Krakow, Poland 5-10 September, 2000

in co-operation with Sietar Europa

For more information, please contact:

Jorge Diaz, ESS Administrator
Marnixstraat 154-I, 1016 TE Amsterdam,
The Netherlands

Tel: 31 20 6242212 Fax: 31 20 6241513

E-mail: bvhouten@euronet.nl

第7回日本コミュニケーション学会 九州支部大会

日時: 2000年10月14日(土)

会場: 九州大学六本松キャンパス

(福岡県福岡市中央区六本松4-2-1)

研究発表募集: コミュニケーションに関わるもの(レ
トリック、マスコミュニケーション、異文化コミュニケ
ーション、ジャーナリズム、スピーチコミュニケーシ
ョン、語学教育等)

応募締め切り: 2000年8月20日(日)

問い合わせ先: CAJ九州支部事務局

〒852-8558長崎市三ツ山町235 長崎純心女子大学人
文学部人間心理学科畠山研究室内

Tel: 095-846-0084 Fax: 095-846-0737

E-mail: hatakeyama@n-junshin.ac.jp

編集後記

* 寄稿記事、学会・研究会の情報。

スタンフォード大学名誉教授の別府先生はじめご寄稿並
びに研究会の情報等ありがとうございました。異文化関
連の研究会等の情報などぜひ、ご一報下さい。

* 2年振りに寄贈図書一覧を掲載。

退任を控えた元所長古田先生が、研究室の蔵書を研究所
資料拡充の一助にと寄贈して下さいてからもう1年以上
にもなりました。関連分野の論文・著書・蔵書等、今後
もぜひ異文研までご連絡願います。

* 夏期セミナー。

開催案内は去年より少し早くお届けでき、スタッフ一同
ほっとしています。宿泊タイプなどが希望に沿えるよう
願っています。10回を数えるセミナーに毎回欠かさず
ご出席の方がいらっしゃるかと。さてどなたでしょう。

* ニューズレター A4版に。

体裁は殆ど変わりませんがこの度活字を大きくしまし
た。用紙の違いにお気づきになりましたでしょうか。
中身は薄くならないよう心します。お気づきの点は何
なりとご意見をお寄せ下さい。